なくては成功は出來ないと思ふ。

イニシアチブ（獨創・創造）

第五には、イニシアチブ（Initiative）獨創、創造である。ものごとに先鞭をつけること、機先を制することが戰捷の第一歩であるごとく、すべてに於て獨創的でなければならない。それがためには、常に研究と準備を必要とする。日常の準備が出來てゐなければ、ものに當つて即座に機先を制することは出來ない。

從つて獨創の偉力を發揮するためには、以上に述べた四つの條件を完全に履行することが必要である。

常に他人より一歩先きに進む、他人のやらぬ方法をやる、他人のやらぬことを發明

して行く、さういふ心構へが常に必要である。これがなければ進歩はない。

昔は煙草を煙管で吸つたが、今はパイプにかはつた。火繩銃は機關銃にかはつた。今次の事變では、空軍のめざましい活躍ぶりを事實に於て見せられるやうになつた。

これは單に發明發見ばかりではなく、われ〳〵の日常の仕事に於て、日常の生活に於て種々獨創的に、日々に新たなる自己を生み出して行かねばならない。

模倣は十年おくれるといふ、今日の時勢に於て十年の距りは非常なる差違である。常に獨創すること、機先を制することが成功の要訣であることを忘れてはならない。

インスピレーション（靈感）

最後に必要な要素として、インスピレーション（Inspiration）を擧げてゐる。この

要素を特に選び出してゐる點について、私はバブソン氏に對して特に深き敬意を拂ひたい。

インスピレーション、靈感、感應、偉大なる天地の力に感應することである。私は先に擧げた誠實、努力、聰明、熱心及び獨創の五要素だけではまだ完全な成功要素と云ひ得ないと思ふ。それは地上に生えた植物でも、如何に注意して水をやり、肥料をよく施しても、あの輝やかしい太陽の光線を享受しなかつたならば、すく〳〵と立派に成長することは出來ないと思ふ。

インスピレーションはこの植物に於ける太陽の光線の如きものであると思ふ。如何に有利な條件があつても成功することを得ない。この光線は卽ち人間の內にひそむところの理性や感情を遙に超越したところの靈の力であると思ふ。この靈の力が宇宙の

偉大なる力と合體した時にはじめて、インスピレーションの偉大なる力が發現する。

この力こそ卽ち宗教である。

私はこの偉大なる靈の力が前述の五要素の上に加はつて、そこにはじめて、偉大なる事業も、學問も、世の中のあらゆる仕事が完成されるものと思ふ。

他の一切の要素を持つと雖も、もしこの偉大なる力一つが加はらなければ、國家社會に對して有用なる仕事はなし得ないと思ふ。この力が發揮されてはじめて有用の人成功の人となることが出來ると思ふ。

もしこの力が缺ければ、片輪の人間、或は知識に偏した人、或は我慾にのみ捉はれた我利我利亡者、といふやうな人間となる。

私は人間に宗教の力が加はることによつて、理性と感情とがよく調和され、統一さ

れて完全な人格が出來上り、そこから起るところのインスピレーションが推進力となつて、それぞれの方面に於て成功を捷ち得るものと確信する。

私は成功の要素の最後にインスピレーションを擧げたところに、バブソン氏の炯眼を感嘆すると共に、社會のあらゆる方面に活動する人が、この深き宗教心の中に目ざめ、すべてを國家社會の進歩發達のためにといふ目標にむかつて邁進されんことを望むものである。

信用は無限の資本

金は信用に集る

金は人間の生活に最も必要なものであつて、命から二番目のものだなどゝ云はれる。外國の諺にも、ダラー・オール マイテー (Dollar Almighty)「弗全能」などいふのがある。

その大切な金もいくら澤山あるからと云つて、これを全部身につけて置くことは出來ない。しかし、家に置いても盜難火難が心配だ、金庫に入れておいたり、瓶に入れて土の中へでも埋めておけば、安全かもしれないが、死藏してゐたのでは折角の金の

効用價値を無にするわけであり、利殖といふ點から見ても、甚だつまらないことである。

そこで、われ〳〵はこれを銀行に預ける。さうすると、その金には三分なり四分なりの利子が得られる。この利子をまた預けることによつて次第に元金も增してくる。この場合、私どもが銀行に金を預けるといふのは、つまり銀行を信用するからはじめて預ける氣持になるのであつて、銀行が不信用ならば、決して預ける氣持にはなれないのである。

今こゝにAとBとの銀行がある。Aの銀行は利息は比較的安いが信用は絶大である。Bの銀行は利息は比較的高いが、信用はAに比して多少劣る。さういふ場合、預金は利息の安いAの銀行に吸收されて、如何に利子が高くとも、Bには餘り預金が集

まらぬといふ現象を呈する。かくの如く信用といふものは云ひあらはすことの出來ない偉大なる力を持つてゐる。

信は萬事の根本である。われ〳〵の生存も社會生活も信あればこそ續けられてゐるのである。

私は先年外國を旅行した際、停車場などに、賣り子のゐないスタンドがあつて、そこに新聞紙や切手などが置かれてあり、必要な人はそこに代價を置いて勝手に持つて行くといふ、實に大衆を信用したやり方を見て非常に感心したのであつた。

もしこれが支那などであれば箱ぐるみ持つて行かれてしまふであらう。また外國で汽車に手荷物を預けてもチツキをくれないところがある。聊か不安な氣持を抱いて先方についてみると、チヤーンと受け取ることが出來る。

銀行の信用する人間

また外國では銀行に預金する場合、受取證を出さない銀行がある。先年日清戰爭の償金二億圓を英國の英蘭銀行に預けるべく公使が持つて行つたが、受取證を出さないといふ。國と國との間でそれでは困るから云ふと、それならば、支那から日本に償金を拂つて、その金を英蘭銀行が預つた、といふ手紙を書くから、それを證據にしてくれといふことであつたといふ。

人と人、國と國、すべて信用から成り立つてゐる。信用は實に無限である。商業上の取引でも、信用制度が確立されてゐなければ、その取引の範圍は非常に狹いものに限られる。一萬圓のものが五萬圓十萬圓の力を働かせ得るのも、皆この信用制度の賜

物である。

世の中で成功する人は、信用を重んずる人である。信用によつてものごとを解決して行くのでなければ成功は覺束ない。

例へばこゝに甲乙二人の人が同じ銀行と取引してゐる場合に、甲なる人は自分のやつてゐる事業の內容を、正直によく銀行に知らせ、誠實に取引をしてゐる。乙なる人は口先きばかりは上手にやつてゐるが、誠實が足らず、自分のやつてゐる仕事もよい方面ばかりを誇張し、惡い方面は務めてかくしてゐる。

世の中が順調で平穩無事である場合はよいが、一朝財界の非常時に際會した場合、銀行はこの二人の事業家のどちらを助けるかと云へば、平素誠實に眞面目に良かれ惡かれ、よく內容を知らせてゐる甲の方に好意を持ち、これを助けることになる。ここ

に平素の信用の偉大なる力が發揮されるのである。

故淺野總一郎氏と故安田善次郎氏とは、その人と人との間に離るべからざる大なる信用が存在してゐた。淺野氏の隨分危險と思はれる大事業も、安田氏はよく了解して金を貸した。

一萬圓の擔保ならば、銀行はその六掛か七掛しか金は貸さないが、人に信用があれば、擔保は何一つなくても一萬圓でも十萬圓でも借りられる。人格手腕を兼備してゐる人ならば、世間にはそれを信用して金を貸してくれる人はいくらもある。それがためには平素の信用が最も大切である。

信用は一朝一夕に出來るものではない。平素の一擧手一投足が積り積つてその人の信用を築くのである。それがためには、日常正直に、眞面目に、熱心に、自己の職務

に努力することである。

もし、その人が正直を缺き、熱心を缺き、努力を缺いでゐる場合は、その人の精神にはスキがある。何となく精神が落ちつかず、安定を缺いでゐる。心の安定を缺いでゐるやうな人物が人に信用され、世間に信用される筈はない。

信用は無限の資本なり、商人たるもの、くれぐれもこれを念頭に入れておかねば、成功は覺束ないと思ふ。

富の增加と生産

生産第一主義

世人多くは金と富とを混同してゐる。金さへ儲ければ富が出來たごとく考へてゐる。勢ひ金儲けには手段を選ばぬといふ風潮が漲つてゐる。

株相場等の投機思惑で金を儲けても、また土地の買思惑によつて金が得られても、それが果して、日本の富を幾何增したであらうか。甲から乙に金が移動したゞけで、そこに何等の變化も認められない。

農家が稻田に苗を下して米を作る、その他の作物を作る。紡績會社が棉花を買つて

糸に紡ぎ織物に作る。製紙會社がパルプから紙を作る。皆これ富を作るのである。卽ち生産は富を作るのである。

しかも、これら生産品を外國に輸出し、その代價を受取れば、それだけ日本の富を增加したことになる。そのまた金によつて、生産をやれば、生産は益々增加する。

將來世に立たんとする青年諸子にむかつて、私は、この觀念から、生産第一主義をもつて進まれんことを切望する。國家的立場から我が日本の富の增加をはかるべく、あらゆる方面にわたり生産化を企てゝ益々富の增加をはかり、富國しかして强兵、の實を擧げられたい。

アメリカ合衆國のあの巨大なる富も、アメリカ・インデアンは拱手なすなかりしもコロンブスのアメリカ大陸發見後歐洲人によつて知識的に開發された賜物である。我

が日本の明治維新以來の大躍進も、この知識的開發にあつた。將來、これが開發の分野はまだ無限に殘されてゐる。富は無限だ。青年諸子の大なる發奮を促したい。

私の事業觀念

バランス・シートに人的要素

今日の文化は資本主義によつて生れた。自由競爭によつて發達した。元來資本主義といふものは個人の利益が土臺となつてゐる。故に個人の利益のためには他人の利益はどうなつてもいゝといふ考へに陷り易い。從つて不正義が行はれ易い。所謂目的のためには手段を選ばぬといふことになる。

AとBとが同じ仕事をしてゐる場合に、AはBを倒さねば自己の伸びる道がない。そこでBの信用をおとすために壓迫を加へ、また自己が優勝者の地位を確保するため

に、不正な競爭や惡辣なる手段方法をもつてBを倒さうとする。この舊式な資本主義の思想も次第に訂正されては來たが、長い間の傳統や習慣によつて、まだ〳〵この弊風は容易に跡を絶たない。

これらは結局、經濟といふことを單なる金儲けの對象として見てゐるところから起る誤謬だと思ふ。

經濟評論などを見ても、その會社の利益とか償却とか、所謂物的內容のみを見て、これを評價してゐるやうであるが、しかし、今一歩突き進んで考へるならば、この物を動かし、利益を生み出し、償却を行ふのは人がやるのだから、この人が誤つた考へを持ち、間違つたやり方をしてゐれば、計算だけよくとも、永遠の眞の繁榮を豫想することは出來ない。

バランスシートの上に、以上の人的要素を加へ、首腦者ばかりでなく、その會社の社員、從業員全部の人的要素を加へて評價する必要があると思ふ。

人格主義

AとBとの會社がある。Aは利益が多く、高配當をやつてゐる。積立金も多く通俗的に第一流の會社と見做されてゐる。Bの會社は利益も劣り配當も少く、積立金も少いが、人的要素を考へた場合斷然Aよりも優れてゐる。

Aの會社の從業員は、支給も少く、待遇が惡いといふのが世間一般の評判である。工場の設備、採光通風等が非常に惡い、搾取主義で、所謂資本家根性でやつてゐる。しかしバランス面だけは前述の通り非常によくなつてゐる。

Bの方の工場は施設もよく従業員の手當支給も非常によい。兩者の従業員の健康狀態を見ると、Bの方がAよりも遙かに優り、工場の人達は非常に氣持よく、和氣靄靄としてゐる。私はこの兩者を比較して、Bの方が本當の經營だと思ふ。

過去の歴史を見るのに、搾取主義の會社は、従業員のストライキなどが起り、遂に内容名聲ともに地に墜ちて沒落の運命を辿つてゐる。私どもは經營者が事業の永遠の使命を自覺し、眞の人間愛に立脚した經營を行ふやうにしたいと思ふ。

銀行と取引を行ふ場合も、Aの銀行ははじめは容易に取引をしないが、さていよいよ取引をするやうになると、實によく面倒を見て、途中いろ〳〵の波瀾があつてもこれを助け、人間味をもつて事業の成功を援助する。

Bの銀行は、さういふ人間味もなく、いざといふ時は事業のことなど考へてはくれ

ず、たゞ銀行の都合だけで、引き上げてしまふといふやり方である。

このAとBの銀行に於て、結局人間味ある銀行が最後の勝利を博するものと思ふ。

私はこの會社全體に漲る人間的要素といふことが無限の財産であると云ふ事に重點を置いて、人格主義的な經營に終始せられんことを希望するものである。

商戰必勝陣（終）

不許複製

昭和十二年九月廿五日印刷
昭和十二年十月一日發行

商戰必勝陣
（奥付）

定價壹圓

著者
檢印
納本

著者　松崎半三郎

發行者　東京市京橋區銀座西一丁目三番地　增田義一

印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一三番地　稻垣武雄

發行所　東京市京橋區銀座西一丁目三番地　株式會社實業之日本社
振替東京參貳六番
電話京橋（五六）五一二一番

納本

大日本印刷株式會社印刷

物の見方考へ方

百二十　定價五拾錢
九　版　送料九錢

日本産業社長
鮎川義介氏著

産業日本の新指導者が事業繁榮法を講述す

本書は著者鮎川氏が、常日頃抱いてゐる生活信念と事業哲學とを、興味ある過去の經歷を中心に物語り併せて將來日本の産業界の行くべき道を、通俗平易に、しかも彫心鏤骨、一言一句の末に至る迄全身の熱意を打ちこんで綴られた名著である。

何人も事業繁榮の秘法として、又立身出世の捷徑として本書を熟讀されよ。

内容主要目次

- 創造の天地……
- 次の世界を語る……
- 道德經濟一元論……
- 新卒業生に訓ふ……
- 創業時代の思ひ出……

實業之日本社發行

日本産業能率研究所長
上野陽一氏著

商人經

五版　壹圓五拾錢
送料拾貳錢

店主讀本として又店員讀本として大歡迎

商人としての心構へが出來てゐなければ如何に仕事を研究しても、それは魂の抜け殻である。如何に心構へをしつかりしても、仕事の仕方の研究が出來てゐなければ、心棒の折れた車を押すやうなものだ。毎日の算盤をとる前に、先づ本書を繙いて對策を立てよ。

法學博士
津村秀松氏著

金廻り物語

壹版　壹圓五拾錢
送料拾貳錢

經濟界の權威者が、轉換期に直面した吾が經濟界を、徹底的に解剖し、批判し、以つて躍進日本の經濟界の前途に對して、幾多の傾聽すべき示唆と暗示を與へたもので、行文平易にして優麗、一讀難解な經濟理論が、容易に諒得出來る斯界の良書である。一般人の新經濟讀本として必讀の名著である。

實業之日本社發行

實業之日本前編輯長

有本歡之助氏著

低金利時代の利殖と投資

重版　壹圓五拾錢　送料拾貳錢

投資家の受難時代來る。利殖家の試練時代至る。金利は底なしに低下してゆくが、目星のつけ方と網の張り方で、案外樂な金儲が、そこにもこゝにもころがつてゐるものである。

本書は斯道の大家たる著者が、貯金、預金、信託、公債、社債、勸業債券、株式等の諸項目に就きて、その秘法を公開したもの。斯界の秘典であり、虎の卷である。

利殖と金儲の近道

十三版　壹圓五拾錢　送料拾五錢

株式で儲けるには
公債で儲けるには
社債で儲けるには
信託を利用するには
勸業債券の利殖は

内容略目

プレミアムの夢……佛貨四分利國債で巨利……
配當以外の配當……一年期限か半年期限か……
必ず儲かる東株……勸業債券の二重利殖法……
人を見て投資せよ……長期有利か短期有利か……
四分利か五分利か……小說家A君が儲けた祕法……
僅か一株から三萬圓……その他利殖法數十項目あり……

文章平易實行簡易

有本歡之助氏著

誰にも出來る貯金法百種公開

壹圓廿錢　送料拾貳錢

長井修吉氏著

さて何れを選ばうか

壹圓五拾錢　送料拾貳錢

長井修吉氏著

サラリーマンの生活戰術

壹圓貳拾錢　送料九錢

長井修吉氏著

目星の付け方株式時代

壹圓貳拾錢　送料拾貳錢

讀賣新聞便利部編

拾圓で出來る商賣

定價八拾錢　送料九錢

實業之日本社編

市井奮鬪傳

市井にあつて赤手空拳遂によく財界に雄飛せる巨頭の評傳

壹圓貳拾錢　送料拾貳錢

實業之日本社編

財界巨頭傳

吾が財界を動かしつゝある巨頭を拉し來つて其全傳を語る

壹圓五拾錢　送料拾五錢

實業之日本社發行

實業之日本社發行

前實業之日本主筆 都倉瓊川氏著 **拔群の人々** 著者卅餘年の記者生活中に、感激させられた十七士の評傳 壹版 壹圓廿錢 送料拾貳錢

西野喜與作氏著 **財政物語** 國家の財政は直ちに國民の財布にひびく。新時代の國民の必讀すべき書 壹版 定價貳圓 送料拾五錢

吾孫子博士 水谷教授共著 解說註釋附 **口語六法（民法篇）** 五版 定價貳圓 送料拾貳錢

辯護士 宮崎直二氏著 改正法に據る **手形と小切手の書き方見方** 壹版 壹圓五拾錢 送料拾五錢

星伊策氏著 **割九々いらずの珠算** 卅五版 壹圓五拾錢 送料九錢

ワナメーカー原著 井關十二郎氏譯 經營秘訣 **ワナーメーカー寶典** 三版 定價貳圓 送料拾五錢

日米新聞前主筆 四至本八郎氏著 **頭腦（ブレーン）トラスト** 米國の不景氣克服の新政策を懇說 三版 壹圓貳拾錢 送料拾貳錢

實業之日本社發行

好評の修養名著

賀川豐彥氏著 **處世讀本** 基督教的處世道 壹版 壹圓五拾錢 送料拾五錢

文學博士 椎尾辨匡氏著 **本當に生きる道** 三版 壹圓參拾錢 送料拾貳錢

三井前重役 米山梅吉氏著 **常識關門** 常識涵養法を懇說 五版 定價壹圓 送料拾貳錢

妙國寺貫主 中川日史氏著 **日蓮主義處世道** 壹版 壹圓五拾錢 送料拾五錢

總持寺貫首 伊藤道海氏著 **禪的處世法** 五版 壹圓廿錢 送料拾貳錢

法學士 横山正男氏著 **洋食の食べ方と洋服の着方** 三版 定價壹圓 送料九錢

農法學博士 新渡戸稻造氏著 **人生讀本** 新人生の見方と考へ方讀本 十九版 壹圓五拾錢 送料拾五錢

「禪の生活」主幹 山田靈林氏著 **禪學入門の書** 壹版 壹圓參拾錢 送料拾貳錢

實業之日本社發行

實業之日本社々長・衆議院前副議長

增田義一氏の名著

改訂增補 **青年と修養** 一〇〇版 定價壹圓五拾錢 送料拾五錢

新時代の青年の進むべき大道を示し、青年のあらゆる煩悶を解決した一代の名著である。

群を拔く道 十九版 定價壹圓 送料拾貳錢

思想善導の基準 廿六版 壹圓五拾錢 送料拾貳錢

大國民の根柢 十七版 壹圓八拾錢 送料拾五錢

運命の打開 六版 定價壹圓 送料拾五錢

處世新道 五版 壹圓五拾錢 送料拾五錢

青年出世訓 十七版 定價貳圓 送料拾五錢

立身の基礎 卅五版 貳圓貳拾錢 送料拾五錢

婦人と修養 十七版 壹圓五拾錢 送料拾貳錢

現代名士奇聞錄 茶前茶後 八版 定價壹圓 送料九錢

英傑の少年時代 九版 定價壹圓 送料拾貳錢

現代名士逸話隨筆 五版 定價壹圓 送料拾貳錢

實業之日本社發行

終